

Reasoning 論の哲学的新展開

一 生命・心・法をめぐる

オーガナイザ 岡本賢吾(首都大学東京)
提題者 太田雅子(東洋大学)
木本周平(首都大学東京)
西村友海(慶應大学)

近年、行為論、情報の哲学、認知科学の哲学、心の哲学、人工知能の哲学、法哲学などの諸分野において、とみに重要性を高め、その興味ある特性がますます認められるようになっていく主題の一つに、「reasoning(推論、理由付け)」の概念がある。残念ながらもまだ多くの哲学研究者の間に十分に認知されているように思われないこの主題について、本ワークショップは、その哲学的な興味の所在と射程の大きさを紹介することを第一の目的としている。

より具体的には、(1)まず一方で、この主題についての最新の知見に通暁している2人の研究者に、近況の紹介と、自身の研究成果の報告とを行ってもらおう。それとともに、(2)この主題が、哲学史の歴史的展開のうちどのような基盤を持ち、そうした歴史的展開そのものについて、どのような新しい視角をもたらしてくれるかを、哲学史と現代哲学の双方にまたがる活動を展開している1人の研究者に提起してもらおう。以上の二つが、本ワークショップの二つの柱である。

現代哲学のコンテキストで言えば、最も典型的には reasoning とは、

一定の状況下に置かれつつ、一定の目的を実現しようと企図している行為者(agent)が、そうした状況と目的との関わりにおいて自らがいかなる行為を選択すべきかを決定するために営む、思慮、推量、判断などの営み

のことである。このような概念が、理論的にも哲学的にも重要性を持つことが認識されようになったのは、やはり最も基本的には、人工知能研究の発展、あるいはより適切には、その背景にある認知科学、情報科学の発展によると言えるだろう。例えば、哲学上の諸概念を現代哲学と伝統的哲学の双方にわたってきわめて網羅的に収集し、精確詳細に解説している用語辞典(ウェブ上のデータベース)として、Stanford Encyclopedia of Philosophyがあるが、その中の大部の一項目「Logic and Artificial Intelligence(論理と人工知能)」(Richmond Thomason, 2013)においては、その第4節「Reasoning about Action and Change(行為と変化に関する推論)」をはじめとして、全12節のうち6節の表題に「reasoning」の語が直接に登場しており、とりわけ第1節第2項「Knowledge Representation(知識表現)」では、現代的な脈絡における reasoning 概念の多様な用例が集成されている。

(<https://plato.stanford.edu/entries/logic-ai/#knowledge>)。

こうした状況が生じたことには様々な理由があり、その点を検討すること自体、本ワークショップの目的の一部であるが、さしあたり明らかであるのは、私たち人間の行為主体が、意思決定のために営む多様な reasoning(思慮、推量、判断の営み)が、一見平易で自明なものにすぎないように見えながら、実は、人工知能を設計する上でも必ず参照せねばならない(言い換えれば、天下一の演繹科学や自然科学理論の導入によっては決して単純に代替できない)独自の機能と意義を持ち、しかもその内実を明確化することが決して容易でない、きわめて複雑で興味深い論理構造、概念的な内実を備えているということである。

こうした事情を踏まえた上で、本ワークショップでは、まず太田雅子氏が、現代の心の哲学において、我々の心的生の極めて特徴的で謎を含んだあり方の一つとして注目を集めている「自己欺瞞(self-deception)」の問題に即しながら、reasoning 概念の重要な一側面についての提題を行う。すなわち、そもそもいかにして通常の合理的主体が自己欺瞞に陥りうるのかを解明する上で、実は当の主体が営む「反省的 reasoning」がきわめて重要な寄与を果している、ということが氏の提題の一つのポイントである。

さらに第二に、熟練した人間主体による reasoning の営みが最も顕著に重要な働きを成す分野である法的判断論について、西村友海氏が提題を行う。氏の中心的なテーマは、一般に法の一般原理は、問題となっている個別事例の特殊な条件によってその適用が差し控えられるという、法推論における最重要問題の一つであり、氏はこの例に即しながら、法的な reasoning が、まさに reasoning という我々の営みの最も独自の特性を体現していることを示す。

ところで他方、よく知られている通り、哲学史的に見れば、reasoning の概念は、近世的な raisonnement、中世の ratiocinatio、さらには古代ギリシアの dianoia(分別知)などにまで遡る馴染み深いものである。だが同時に、特に近代以降の哲学的展開においては、例えばヘーゲルなどにも見られる通り、reasoning は、我々の誰もが日常的に遂行している自明で空疎な理由づけの営みといったもの(悟性推論)とされ、少なくとも、認識論や心の哲学などの観点からすれば、およそ重要な興味を含まない一主題として、ほとんどもっぱら否定的・消極的な仕方であられた。第三の提題者・木本周平氏は、ヘーゲル研究を基盤としながら、現代の規範論・reasoning 論を広く探究している研究者であるが、彼の提題の一つのポイントは、実は、以上のような近代の哲学者たちの reasoning 概念に対する見かけ上の否定的評価は、少なくとも決して単純に額面通りに受け取られてはならず、むしろ、ヘーゲルらの自然的規範や生命の概念の取り扱いのうちに見て取れる通り、彼らはそうした否定的取り扱いを通じて、まさに現代的な reasoning の哲学が明らかにしつつあるこの概念の固有の哲学的射程を、例えば「単なる悟性推論を超えた理性的な概念把握」としてより深い仕方では省察し、明るみにもたらした、ということにある。

以上の通り、reasoning の哲学は、現代的にも、哲学史的にもますます発展する可能性を秘めており、本ワークショップはこうした事情をより多くの研究者に向けて発信することを目指している。